

## 屋敷雛形の書誌的考察

A BIBLIOGRAPHICAL STUDY OF JAPANESE MANSION  
DESIGN SOURCEBOOKS "YASHIKI-HINAGATA"山崎 純\*<sup>1</sup>, 岡本 真理子\*<sup>2</sup>, 河田 克博\*<sup>3</sup>, 麓 和善\*<sup>3</sup>  
仙田 満\*<sup>4</sup>, 内藤 昌\*<sup>5</sup>Jun YAMAZAKI, Mariko OKAMOTO, Katsuhiko KAWATA,  
Kazuyoshi FUMOTO, Mitsuru SENDA and Akira NAITO

For the purpose of systematical studying of Japanese traditional theory of architectural design, especially about its historical and cultural meaning, we study the architectural characteristics of the orthodoxy of the architectural books on Japanese traditional houses "Yashiki-Hinagata" by treating of them from bibliographical, substantial, and theoretical aspects. In this paper, we organized 7 types from 62 materials of "Yashiki-Hinagata", and analyzed them bibliographically. As a result, in the end of 15C, principle books were formed with the concept of "Oku", and they became memorandums with the concept of the practical design of Buke-Yashiki. In the 17c, learned books were made for the organization of systematical theory of housing design, after that they spread as miscellaneous records.

**keywords :** "Yashiki-Hinagata", "Oku", bibliographical study

屋敷雛形, 屋, 書誌的考察

## 序

日本建築が彩なす空間が、世界に誇る〈古典〉として美的体系の極致を顕現している事は、今日あまねく評価されている。そして、建築というものが常に時代の文明・文化を結集して生まれてきている以上、環境の造形という設計行為には、精神文化を基盤とする哲学・美学をふまえた〈日本古典建築学〉としての設計理論が存在する。古来日本では、それは番匠・棟梁の伝統〈技芸〉として研鑽されてきた。さらに中世末から近世の建築界においては、彼らの高邁な識見は建築学教書としての系統的記述を備えた建築書へと顕現させたのである。こうした〈日本古典建築書〉は、現在では総数600余本を確認できる。人類の文化とその社会的営みをめぐる危機的状況が叫ばれ、建築に鑑みて非西欧圏における構築方法の歴史相検証を今日的課題とする我々が、歴史的背景を基盤とした日本建築の将来像を確実に展望するためには、日本古典における「建築学としての設計理論」、すなわち設計「学理」に注目して、その本質的な具体像を明らかにする必要があると考える。

そこで本研究は、日本が近代高等建築教育で軽視した日本建築様式における設計学理を、日本古典建築書の分析から探究する事を目的として、ここでは特に、住宅に関する建築書を「屋敷雛形」と総

称して集成し、直接の研究対象とする。そして本稿にはじまる「屋敷雛形の研究」では、住宅建築様式に際する理論の正統について、設計理論の展開過程とその文化的意義を体系的に論じ、最終的には、中・近世建築界に果たした〈日本古典建築学〉体系を歴史評価する。

まず本稿では、悉皆調査より明らかとなる62本に及ぶ「屋敷雛形」史料を、系列ごとの成立年代順に書誌的考察を行う。そして個々の内容的・学理的な考察は別稿に譲り、とりあえず書誌の上から屋敷雛形の変遷を通観して、その特質を論じる事を課題としたい。

## 1. 屋敷雛形の系列

日本古典建築書には、中世・近世に活躍した大工家に秘伝書として伝わる筆写本と、公刊された木版本とがある。秘伝書については、各書の筆者や伝来経緯による流派（四天王寺流・建仁寺流）や組織（上方、作事方・小普請方）の別により、技術的な内容面において系列化できる事が判っている<sup>1)</sup>。そこで本研究では、①「上方覚書系本」（14点）、②「四天王寺流系本」（6点）、③「武家雛形系本」（20点）、④「加賀建仁寺流系本」（8点）、⑤「江戸建仁寺流系本」（7点）、⑥「小普請方系本」（2点）、⑦「雑録系本」（5点）の各系列ごとに、その書誌を述べていきたい。

\*<sup>1</sup> 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻  
大学院生・工修

\*<sup>2</sup> 東海女子大学文学部美学美術史学科 教授・工博

\*<sup>3</sup> 名古屋工業大学工学部社会開発工学科 助教授・工博

\*<sup>4</sup> 東京工業大学工学部建築学科 教授・工博

\*<sup>5</sup> 愛知産業大学造形学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Dept. of Architecture and Building Eng., Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Aesthetics and Art-History, Faculty of Literature, Tokai Women's College, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban & Civil Eng., Faculty of Eng., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Formative Arts, Aichi Sangyo University, Dr. Eng.

## 2. 上方覚書系本

建築先進地域・上方の建築技術を誇る<sup>2)</sup>、伝統ある上方覚書系本は、室町時代に遡る中世建築書以降、14史料が確認できる。〈屋〉の理念的な要素が覚書へと移行する、建築書として萌芽的段階を示す諸史料で、全史料に共通する特定の学理はない。

### 2-1. 『三代巻』(『愚子見記』「八」所収) [以下三代]と略記する] :

「日本番匠記系本」と称する中世建築書は、一部に寸法構成論(木割)に関する内容をもつ。ここに全体的様式に貫かれた設計体系の祖型が成立して、日本古典建築書の先駆的存在とみなせる。「日本番匠記系本」は現在13史料が確認されるが<sup>3)</sup>、このうち、『愚子見記』「八」に所収の『三代巻』は漢文体による写本で、長享3年(1489)7月の春庵昌椿の著である<sup>4)</sup>。慶長18年(1613)に北川弥介、寛永15年(1638)に妙光院澄英、同17年に平政隆が写し、天和2年(1682)に平政隆が『愚子見記』に記録した史料で、現存日本建築書のなかでは最古の奥書年記をもつ。番匠式の由来・天竺祇園精舎の事等を解説する9段構成で、その1段として日本堂・唐様堂・塔・祠(社)・屋の設計論を〈説文〉(文章で説いた記述)で記す。住宅設計に際し「屋敷〜六分敷」との根本理念が明示されるが、設計技術に関する具体性に乏しく、建築設計書として未だ〈原理書〉の段階にある。

### 2-2. 『(寿彰覚書)』(新見貢次氏蔵) [以下寿彰] : 袋綴1冊・美濃本(28.2cm×20.5cm), ( )内史料名は元史料にないので仮称、以下同。

題名はなく仮称。洲本の大工、斎藤家伝書。惣大工「寿彰」により書き付けられ、室町時代末期の永禄5年(1562)あるいは天正2年(1574)の成立である<sup>5)</sup>。全80項目は大きく、堂・社・門の木割体系の記録、堂・門・社・塔・屋の建築木割と屋に関連する道具寸法、祝儀等の記録・雑録から編成され<sup>6)</sup>、豊後府中周辺にある大友惣領家に関連する作事内容である。屋については大友政親・義監・義統造営の屋敷に関する実録で<sup>7)</sup>、家伝資料的な〈覚書〉といえる。

### 2-3. 『(林宗廣)木摧』(東京都立中央図書館木子家文庫蔵) [以下木摧] : 袋綴1冊(全2冊)・小本(17.0cm×12.0cm)

室町時代から、内裏造営にあたる大工惣官の地位にあった木子家、木子清敬によって集成されたもので、『(林宗廣)木摧雑部』との全2冊である。木摧は天正5年(1577)2月・林宗廣の著で、寛永20年(1643)に宗相がこれを書写する際、『(林宗廣)木摧雑部』はその補足説明として書き加えられたと推察できる。全35項目は主として、〈武家〉用建築の設計論7項目と門・社・堂・塔の設計論からなり、前者は〈説文〉による広間・武家門・台所・厩等の記載内容である。

### 2-4. 『(今福彦兵衛伝来目録)』(第1冊) (安田家蔵) [以下今福] : 無表紙・仮綴1冊(全2冊)・中本(19.3cm×13.7cm)

安田家は中井家支配の並棟梁で、本書はその設計技術書である<sup>8)</sup>。題箋等はなく、筆者も不詳であるが、表紙と奥書の由緒「慶長十二年(1607)三月三日今福彦兵衛殿ヨリ相傳」より、上記のように仮称しておく。また「(第2冊)」は塔についての内容である。記載内容は、全7項目が武家屋敷の設計論で、武家門・広間・厩に関して〈説文〉記述されている。

### 2-5. 『御広間のもくろく』(鶴岡市立郷土資料館蔵) [以下もく] : 白表紙・袋綴1冊・半紙本(25.2cm×17.5cm)

慶長19年(1614)11月の年記をもち、最上義光の大工頭であった小沢光祐により記された建築書である。広間・厩の設計論に関する内容を、全4項目で〈説文〉記述する。

### 2-6. 『(小沢光祐覚書三十一色)』(鶴岡市立郷土資料館蔵) [以下小沢] : 白表紙・袋綴1冊・半紙本(22.5cm×16.6cm)

奥書「小沢若狭守/慶長廿年(1615)十月十一日光祐」(ノは原文改行箇所)、最終丁「以上三十一色有」より上記のように仮称する。全31項目は、社・堂・門・塔・屋の建築設計論と道具の寸法論を含む広範にわたる内容で<sup>9)</sup>、一通りの建築種類を網羅する事を意図して書かれた書といえる。屋に関する記載内容は、厩・主殿・鞠懸に関する10項目で、全て〈説文〉によるが、主殿外部構成の記述はなく内部構成(室内造作)についての設計論のみから構成されて、道具について比較的詳細に説く学理構成との関連が重要である。

### 2-7. 『(孫七覚書)』(名古屋工業大学蔵) [以下孫七] : 茶表紙・大和綴1冊・半紙本(22.3cm×15.8cm)

奥書に「慶長式拾年(1615)卯月吉日 孫七」とある事から、上記のように仮称する<sup>10)</sup>。内容は全35項目で小沢とほぼ同項目を有し<sup>11)</sup>、項目順序は異なる事から共通の祖本の存在が推定できる。本書は〈説文〉により全てカタカナ書きされている事から推して、孫七なる者が上方系の設計技術を口述筆写した〈覚書〉と考える。

### 2-8. 『(巧匠秘術書)』(清川市立博物館岩城家文庫蔵) [以下巧匠] : 金地金模様入布表紙・袋綴1冊・横本(13.1cm×19.2cm)

寛永7年(1630)3月の奥書年記ある林宗相により著された史料で、同じく宗相が筆写した木摧との類似性が認められる。全16項目のうち、屋に関する8項目は広間の設計論を〈説文〉記述しているが、あえて項目名称に「寝殿」の語句を用いる復古的特徴が特記できる。

### 2-9. 『(河内家伝来)これハカミカタ用(二十三色)』(河内家蔵) [以下河か] : 無表紙・仮綴1冊・横本(13.2cm×18.8cm)

序文に「扇谷坂仲住人/河内吉左エ門」とあり、成立年代は明記されていないが、吉左衛門の著書の年代幅から寛永15年(1638)~寛文元年(1661)の間と推定する。この河内家は、鎌倉扇ヶ谷を居所とする建長寺大工棟梁の家柄で、多数の技術書が伝来している。本書は表題に〈上方用〉とあるとおり、上方系の設計技術を伝えている。全23項目は、屋・道具・門・社・堂と広範な内容で<sup>12)</sup>、屋に関する6項目の記載内容は広間の室内造作と鞠懸について〈説文〉記述されているが、いずれも道具に関する学理と呼応関係がある。

### 2-10. 『(河内家伝来)これハカミカタ用三ツノ内』(河内家蔵) [以下河三] : 無表紙・仮綴1冊・横本(13.2cm×18.9cm)

筆録年記はないが、河かと同一の序文を有し河内吉左衛門の著である。内容は堂と屋に関する3項目で、屋に関しては広間中門についての〈覚書〉といえ、体系的記述ではない。

### 2-11. 『(河内家伝来)大中小三めん』(河内家蔵) [以下河大] : 茶表紙・大和綴1冊・横本(12.1cm×18.0cm)

「万治四年(1661)/九月吉日/扇谷坂仲ノ吉左衛門ノ住人河内」とあり、内容は10項目にわたり本堂に関する項目後に道具が述べられ<sup>13)</sup>、補足的に広間車寄に関する〈説文〉記述を1項目加えている。

### 2-12. 『(愚子見記)「五(屋舎)」(法隆寺蔵) [以下愚五] : 紺地紋入表紙・袋綴1冊(全9冊)・横本(13.6cm×19.6cm)

西岡家に保管される本書は、京都大工頭中井家配下棟梁平政隆の編なる建築書で、天和2~3年(1682~83)以降にまとめられた<sup>14)</sup>。第1冊は家相・儀式、第2冊は禁裏女院御所の造営、第3冊は社頭伽藍、第4冊は京・大和の諸社寺、第5冊は屋舎・城郭、第6冊は武家故実として一般に伝えられる武用道具、第7冊は諸道具類、第8

冊は算数度量および三代等、第9冊は積算についての雑録が記されて<sup>9)</sup>、建築全般にわたる諸々の知識を述べる建築百科全書の様を呈している。そのなかで、寛文11年(1671)の成立である愚五は「屋宅」「舞台」という屋敷雛形を有し、39項目にわたり屋の由来・吉凶の問題をはじめ、天井高・唐破風等の部分寸法、厩や鷹部屋・舞台、持仏堂や礼堂等の武家屋敷諸施設から、さらに学問所・政所・客殿等に至るまで、(貴族)住宅とその住宅内諸施設に関する博学な識見を説いており、まさに博物学的な編纂姿勢が看取できる。

2-13. 『諸木碎目録以上三十壹色』(鶴岡市立郷土資料館蔵) [以下<sup>10)</sup> 目録]: 水色白表紙・袋綴1冊・美濃本(29.0cm×18.7cm)

奥書に「貞享四<sup>11)</sup>年(1687) / 正月日 小林瀬左衛門」とあり、秋田庄内藩の木工棟梁小林家に伝来する様々な建築書をまとめた史料である。全31項目は武家用・聖家用・社家用建築の(説文)による設計論と、儀式に関する項目から構成されている。武家屋敷に関する広間・厩・舞台の5項目を述べ、広間の内容はもくと酷似している。

2-14. 『(高良大社伝来)番覚帳』(高良大社蔵) [以下<sup>12)</sup> 番覚]: 袋綴1冊・半紙本(24.6cm×17.2cm)

表紙に「正徳六年(1716) / 番覚帳 / 申正月十一日 / 山田氏」とある。著者の山田氏は、筑後地方に強大な勢力を誇った高良大社に属した大工で、相当の技術水準を誇った者と考えられる。全32項目は、そのほとんどが道具と数寄屋を中心とする内容で<sup>9)</sup>、その項目間に社・門・堂の設計寸法についても(説文)記述されており、屋に関する記述内容も、厩の項目以外は数寄屋との関連で講述している。全体的に、雑然と書き留められた(覚書)の性格が強い。

### 3. 四天王寺流系本

四天王寺流は江戸幕府作事方の創設以来、大棟梁職を代々継承した平内家をはじめ、「和様」の建築技術を得意とする流派といわれている<sup>9)</sup>。四天王寺流系の屋敷雛形は6史料が確認できる。

3-1. 『諸記集』(静嘉堂文庫池上家文庫蔵): 茶表紙(後補)・袋綴1冊・美濃本(26.7cm×19.1cm)

『諸記集』は、「武家記集」[以下<sup>13)</sup> 諸武]「門記集」「社記集」「堂記集」「塔記集」の順に記述され<sup>9)</sup>、『諸……』の主題を武家・門・社・堂・塔とする。慶長13年(1608)中秋に記したとする「正信」奥書と、慶長15年正月の「屏内吉政」奥書を持ち、元和3年(1617)の「屏之内正信」、元和9年(1623)の黒田正重、延宝3年(1684)の辰巳光政の相伝を経て、現本は江戸中後期の池上延世による写本である。諸武の14項目は、まず主殿(広間)の躯体部を(図面)で説明しているが、それ以降は全て(説文)により設計論を詳述する。その記載内容は主殿・扉重門・厩についてである。「武家記集」の題名どおり、武家屋敷を構成する諸建築の設計方法を(覚書)する内容といえる<sup>9)</sup>。

3-2. 『故事秘伝書』(東京大学蔵) [以下<sup>14)</sup> 故事]: 紺表紙・1巻・卷子本(24.9cm×791.0cm)

「承應四<sup>15)</sup>年(1655)二月九日 / 後大隈守正勝」の奥書を持ち、さらに政長が宝暦3年(1753)に田中市兵衛へ送るために能筆家に筆録させたものに、年月日・自著・宛名を書き加えたものである<sup>9)</sup>。監修「平之内大隈守藤原正信」からも、内容的には諸武と近似して、さらに後述<sup>16)</sup> 匠殿にみる(図面)の学理内容を含み、諸武から匠殿へと学理体系化をはかって再編纂される際の重要な基幹史料と考定できる。序文・奥書を含む14項目は、多様な(図面)と漢文体で記される

(説文)からなり、諸武・匠殿と共通する内容以外にも、屋に関連して「産室」「陣屋」「十二因縁」といった「故実」を説きそれを「秘伝」として述べる、正統性を強く誇示する記載内容となっている。

3-3. 『匠明(東大本)』『殿屋集』(東京大学蔵) [以下<sup>17)</sup> 匠殿]: 紺色紙表紙・1巻(全5巻)・卷子本(18.8cm×1870.7cm)

『匠明』は「門記集」「社記集」「塔記集」「堂記集」「殿屋集」からなる5巻構成で、他に類本(大島本・米野本等)が現存する<sup>10)</sup>。『諸記集』と同じ奥書年記の慶長13年中秋「平内政信」と同15年初春吉日「平内但馬守吉政」がある。しかし、この東大本は江戸時代中期初頭の写本である。諸武とほぼ等しい内容構成をもつ慶長期の祖本を基にマクロで体系的な設計学理を意図して改題再編纂されたものが匠殿で、その成立時期は承応4年(1655)年を遡るものでない<sup>9)</sup>。匠殿の前述奥書を含む21項目は、前半部の主殿(広間)と厩の設計論を記す(説文)と、後半の平面図・配置図を集成した(図面)群に大別できる。これは住宅建築の多様性を説き、さらに技術内容以外の建築名称由来や奥書も記される。構成・内容は極めて体系的で、「殿屋集」の題名を裏付ける貴族住宅建築学書として(学理書)が大成している。

3-4. 『武家殿閣之図式』(東京大学蔵) [以下<sup>18)</sup> 殿閣]: 茶表紙・1巻・卷子本(29.0cm×1055.4cm)

宝暦10年(1760)中秋藤原政武の記で、文政11年(1828)平内廷臣の写本である。21項目からなり、それぞれ平面・立面・断面・部分詳細といった(図面)に一部設計寸法を書き加えて、武家屋敷の諸建築の規範を示している。内容は、広間・対面所などの中心的殿舎、舞台・鷹部屋等の付属的施設、各種の武家門を説いている。

3-5. 『武家全』(東京大学蔵) [以下<sup>19)</sup> 武家全]: 茶布表紙・1巻・卷子本(37.8cm×1510.2cm)

平内家伝書。筆写年代・著者に関する記述はなく、江戸時代後期の史料と推定できる<sup>13)</sup>。全て(図面)からなる30項目で、建物名称を記した立面・断面図が記載される。武家門や広間・主殿・対面所といった中心的殿舎、および厩・鷹部屋等の他に「文庫」「台所」「井戸」「雪隠」といった付帯的なものまでが描かれ、武家屋敷の諸建築を網羅的に叙述しようとする編纂意図が看取される。

3-6. 『(戸崎知重伝来目録)』『三番』(秋田県立秋田図書館蔵) [以下<sup>20)</sup> 三番]: 浅黄地金模倣入布表紙・1巻(全3巻)・卷子本(34.4cm×1514.0cm)

「一番」「二番」との全3巻。無題だが、巻頭名から仮称する。戸崎家は代々秋田佐竹藩に仕えた大工で、その第11代知重は文化・文政頃に江戸で学び、多くの写本を残している。筆写年代は不記だが、江戸時代後期と推定できる。三番は門・社・屋についての31項目を記す。門の説明間に神厩を説く構成は、公刊本の<sup>21)</sup> 断二と等しい。広間については匠殿との類似性が指摘でき、こうした著述様態から推して、当書は複数の史料を引用して編纂・成立した可能性が高い。

### 4. 武家雛形系本

江戸大工棟梁家に代々伝わる、筆写本の(秘伝)的な建築技術書に対し、江戸中期になると木版による公刊本が現れる。公刊本は、版や題名を改訂しながら江戸後期・明治期に至るまで再版を繰り返しており、当時はかなりの需要があったと推される。また、公刊本の原典には筆写本からの影響が認められ、加えて公刊本成立以降の建築書には、公刊本を参照とする筆写本の展開がみられる。そこで、これらを武家雛形系本と総称して類別すると、20史料が確認できる。

4-1. 『竹内右兵衛覚書』(松江城管理事務所蔵): 紺表紙・袋綴1冊・横本(7.3cm×15.6cm)

奥書「はゞかりながら書つけおき候／此書物もしおとし候ハゞひとへに目くらの杖をうしなへるにて候…(中略)…竹内右兵衛」から上記のように仮称する<sup>1)</sup>。竹内家初代で松江藩大工頭を勤めた右兵衛の経歴から、寛永15年(1638)～承応3年(1654)の成立である。内容は実用本位の〈覚書〉で、専ら意識や形式的記述はみられない。構成は大きく、住宅設計における易学上の問題とその諸建築設計論に関する前半部分、松江城本丸・二之丸の建築規模を伝える後半部分からなる。屋について記述する「武家之部」[以下「武」]は、武家屋敷に関連する26項目で<sup>2)</sup>、武家門に始まり、広間、武家故実の儀式用諸施設としての舞台・鞠懸・厩・数寄屋・鷹部屋等の建築設計論と、日常生活に関わる広範な道具に関する記載がみられる<sup>3)</sup>。

4-2. 『新編 武家雛形(横山家本)』(横山家旧蔵): 袋綴1冊・美濃本(36.1cm×26.2cm)・双边無界・版心なし

4-3. 『新編武家雛形(国会図書館本)』(国立国会図書館蔵): 薄茶表紙(後補)・袋綴1冊・半紙本(30.0cm×21.8cm)・双边無界・版心なし

両書とも同版史料である[以下「武」]。横山家本には、「時明暦元年(1655)<sup>4)</sup>年記秋上漸／武易豊嶋郡江府／瀬河政重撰」の刊記があり、現在確認できる公刊木版本の屋敷雛形として嚆矢である<sup>5)</sup>。同じ編者による同年刊行の宮雛形、公刊本『新編雛形』(国会図書館蔵)との2冊組で出版された可能性も推される。奥書によると、『新編武家雛形』には原典の存在が明かで、著者の師匠が以前に木版本として刊行したものを、師匠の遺命に沿い先の師匠の書に基づき本書を出版する過程がしられる。よって先の武家雛形との重複部分・付加部分があるとの説明がある。漢文体で記される序文・奥書を除き、設計論を述べる〈説文〉はひらがな書きされ、平明性が意識されている。各項目は、平面・立面図(納戸構の項目のみ展開図)の〈図面〉が1枚ずつ記載され、その後〈説文〉にて設計論が述べられている。記載内容は、武家屋敷に関する諸殿舎の設計論を12項目たて、武家門、舞台・鞠懸の儀式用施設、そして広間・厩の設計論を説いている。

4-4. 『新編三雛形』(「新編武家雛形 上」(京都府立総合資料館蔵)[以下「新上」]: 紺表紙・袋綴1冊(全3冊)・美濃本(28.1cm×21.0cm)・双边無界・版心「武家雛形／(丁数)」

「新上」は「新編宮雛形 中」「四十八棚 十分一乃地割 下」<sup>6)</sup>との3冊組。棚雛形に「万治元(1658)<sup>7)</sup>年中秋上旬」の刊記をもち<sup>8)</sup>、内容は「武」にほぼ等しい。『(新編武家雛形)』(西尾市立図書館岩瀬文庫蔵)・『工匠伝書 武家・社殿・棚雛形』(東京大学陽明文庫蔵)・『武家雛形』(鶴岡市立郷土資料館蔵)・『大工雛形』(下)(東北大学狩野文庫蔵)はいずれも同版史料で、この万治版は多数公刊されたようである。

4-5. 『武家木碎』(鶴岡市立郷土資料館蔵)[以下「武碎」]: 白表紙・袋綴1冊・半紙本(24.5cm×17.0cm)

著者・著述年代は不明だが、江戸時代前期のものとして推定できる。武家屋敷設計論の4項目は、全て〈説文〉記述され、広間に関連して玄關、広間外・内部意匠と塀重門の設計論を展開する。

4-6. 『(大工雛形)』(「新編武家雛形」(国会図書館蔵)[以下「新武」]: 紺表紙・袋綴1冊(全3冊)・美濃本(27.8cm×19.7cm)・双边無界・版心「武」(丁数)

「新武」は「新編宮雛形」「新編四十八棚雛形 十分一ノちわり」<sup>9)</sup>との3冊組<sup>10)</sup>。筆者等は不記だが、棚雛形に「寛文十三(1673)<sup>11)</sup>年初夏吉日」の刊記をもつ。「新武」は「新上」に酷似する。

4-7. 『大工雛形』(上)(竹中大工道具館保管)[以下「大上」]: 茶表紙・袋綴1冊(全3冊)・大本(30.3cm×20.6cm)・双边無界・版心「武家雛形／(丁数)」

奥書「貞享二(1685)<sup>12)</sup>年曆三年吉日洛陽小路永田長兵衛版」と、公刊本の武家雛形として最も早く出版者(永田文昌堂)が確認できる。「(宮雛形 中)」「(四十八棚 十分一乃地割 下)」<sup>13)</sup>(竹中大工道具館保管)は同年の刊記があり、同時刊行されたと推される。

4-8. 『数寄屋工法集』(冬)(東京都立中央図書館蔵)[以下「数冬」]: 青表紙・袋綴1冊(全4冊)・半紙本(25.4cm×17.2cm)・单边無界・版心なし

4冊は内容的に、数寄屋に附属するものの仕様を記す「春」「夏」、数寄屋建築の各種典型を伝える「秋」、屋敷雛形の「冬」に大別できる<sup>14)</sup>。「春」の序文に「城州山崎住／伊藤氏景治／謹誌」、「冬」の巻末刊記に「貞享三<sup>15)</sup>年(1686)三月上旬書肆版行」とある。四帖半の数寄屋基本形にこだわらず、比較的細部にわたる技術詳細が説かれて<sup>16)</sup>、なかんづく公刊本として出版された事に注目すべきである。体系的な故実書の様相を呈しているが、内容に形式的記述は少なく、数寄屋設計技術の大衆化をはかり出版したとする経過からみても、実用的な編纂意図が認められる。「数冬」の10項目の記載内容は、書院、塀重門・茅門、厩、鷹部屋、鞠懸、舞台である。武家屋敷という広間を「書院」と称し、また室内造作として広間に特有な納戸構は記載されない事に、当書の学理的特質を顕現している。

4-9. 『(大匠雛形)』(「武家雛形二之巻」(金沢市立図書館蔵)[以下「武二」]: 紺表紙・袋綴1冊(全4冊)・横本(12.6cm×20.5cm)・单边無界・版心「武」(丁数)

「宮雛形一之巻」「四十八棚三之巻」「小坪規矩四之巻」<sup>17)</sup>との4冊組で刊行される。「元禄十二(1699)<sup>18)</sup>年八月日 永田調兵衛」の刊記をもつ本書は、公刊本として始めて横本形式の史料で、これまでの公刊本の形を変えての復刻が刊行目的であったと考えられる。

4-10. 『(大工雛形)』(「新板武家雛形 二」(内閣文庫蔵)[以下「大二」]: 紺表紙・袋綴1冊(全6冊)・横本(15.7cm×22.4cm)・单边無界・版心「武」(丁数)

「新板宮雛形 一」「新板棚雛形 三」<sup>19)</sup>「新板数寄屋雛形 三下」「新板小坪規矩 四」「新板小坪規矩追加 五」<sup>20)</sup>との6部作<sup>21)</sup>。現称は『大匠雛形』であるが、版元の出版目録によると『大工雛形』が本来正しい。最終冊「五」の「享保二年(1717)／<sup>22)</sup>九月吉日／江戸日本橋通一町目／書肆 須原茂兵衛版」から、江戸の出版である。

4-11. 『武家殿閣建地割』(東京大学蔵)[以下「殿閣」]: 紺表紙・1巻(全6巻)・卷子本(22.3cm×1477.8cm)

『諸門建地割』『仏殿建地割』『諸堂建地割』『諸塔建地割』『諸類建地割』と組なる筆写本<sup>23)</sup>。元文4年(1739)に深谷治直の指図、益子清常の記録による。平内家伝書だが、公刊本からの明らかな引用部分を含むゆえ、武家雛形系本に類別する。目録に「武家形工之巻」とあるように、38項目の記載内容は武家屋敷に関連して、武家門・玄關、そして広間、鷹・犬部屋・鞠懸・舞台・厩の設計論を示している。公刊本的要素に加えて平内家・甲良家による屋敷雛形との内容的な類似項目がみられ、寄せ集め的な史料構成である<sup>24)</sup>。

4-12. 『新選増補大匠雛形大全』(「諸門塀之部 広間納戸掛二」(内閣文庫蔵)[以下「新二」]: 紺地紋入表紙・袋綴1冊(全5冊)・半紙本(25.5cm×17.8cm)・单边無界・版心「○大匠大全巻二／(丁数)」

「宮殿之部 組物口伝 継目口伝一」<sup>25)</sup>「彫物絵様之部 潤筆之口伝三」<sup>26)</sup>「数寄屋之部 諸勾配口伝四」<sup>27)</sup>「違棚数品 小道具之部」<sup>28)</sup>との5部構成で刊行される。中井猪右衛門正春の序、山田泰平の著で「寛

永四年<sup>9</sup>（1851）冬十一月」の刊記をもち、出版者は「京都 勝村治右衛門／大坂 河内屋喜兵衛／秋田屋太右衛門／名護屋 永樂屋東四郎／仙台 伊勢屋半右衛門／江戸 岡田屋嘉七／須原屋伊八／英屋大助」「版元 須原屋茂兵衛」と、全国各地で同時に発行された事が判明する。これまでの公刊本と比較して記載内容はより幅広く、編成分類の方法が異なる。これまで「宮雛形」に記される項目を<sup>(12)</sup>は収録し、また逆に、これまで「武家雛形」に記載ある既の設計論は本書にない。しかしながら、内容はこれまでの公刊本と等しい。

4-13. 『増補大匠雛形』「新板武家雛形 二」（蓬左文庫蔵）[以下<sup>(13)</sup>]：紺地紋入表紙・袋綴1冊（全6冊）・横本（14.7cm×22.4cm）・短辺無界・版心「武・（丁数）」

「新板宮雛形 壹」「新板数寄屋雛形 三」「新板棚雛形 四」<sup>(14)</sup>「新板小坪規矩 五」「新板小坪規矩追加 六」<sup>(15)</sup>との6冊構成。享保版『大工雛形』を原刻とする「慶応二年<sup>9</sup>（1866）春再版」。「壹」は東京本所の鈴木勘右衛門正豊、他は奥州盛岡の本林重之助常将の再版である。

4-14. 『武家方絵図』（筑波大学蔵）[以下<sup>(16)</sup>]：紺表紙・1冊（全4冊）・折本（30.0cm×21.2cm）

『門の図』『宮之図』『諸堂の図』と組なる筆写本。著者等は不明だが、江戸時代後期のもので推定できる。武家屋敷に関する、武家門・玄関、遠侍、広間、舞台、僧堂、既の設計論17項目からなる。

4-15. 『武家形 十』（秋田県立秋田図書館蔵）[以下<sup>(17)</sup>]：無表紙・1巻・卷子本（27.5cm×908.0cm）

戸崎家伝来の筆写本であるが、著者等は不明。江戸時代後期のもので推定できる。17項目からなる<sup>(18)</sup>の記載内容は<sup>(19)</sup>と酷似する。

4-16. 『武家造 榮雛形集』（仙台市立図書館蔵）[以下<sup>(20)</sup>]：紺表紙・袋綴1冊・美濃本（28.4cm×19.4cm）

朴沢家伝来の筆写本であるが、著者等は不明。江戸時代後期のもので推定できる。序文を含む16項目の記載内容は、武家門に関する記述を除き<sup>(21)</sup>に類似するが同文ではなく、また〈図面〉もよく似てはいるが書込部分が異なる。<sup>(22)</sup>とは構成順序も異なる。つまり当書には、<sup>(23)</sup>内容を改良しようとする編纂意図が見受けられる。

## 5. 加賀建仁寺流系本

建仁寺流系本は、江戸を中心にした「江戸建仁寺流系本」と、加賀藩領を中心に伝存している「加賀建仁寺流系本」に大別できる<sup>24</sup>。北陸、特に加賀藩領の加賀・能登・越中では坂上家を先例として山上家・清水家等、建仁寺流と称する大工の活躍が多数認められ<sup>25</sup>、この加賀建仁寺流系における屋敷雛形は8史料が確認できる<sup>26</sup>。

5-1. 『鎌倉御所広間図』（静嘉堂文庫池上家文書蔵）[以下<sup>(27)</sup>]：茶地金紋様入布表紙・1巻・卷子本（28.8cm×363.4cm）

元禄14年（1701）～元文4年（1739）を成立時期とする池上吉政・大西政乗父子による著<sup>28</sup>、現本は池上延世による寛延3年（1750）～寛政元年（1789）の写本。記載内容は、広間についての〈図面〉主体の6項目からなる記述で、平面・立面・断面図と部分詳細図からなる。作図にあたっての下書きが併描され、随所に寸法・比率も併記されており、後述<sup>(29)</sup>・<sup>(30)</sup>に対する草稿的傾向が強くみられる。

5-2. 『鎌倉御所総絵図』『乾』『坤』（静嘉堂文庫池上家文書蔵）[以下<sup>(31)</sup>]：茶地金紋様入布表紙（後補）・2巻・卷子本（「乾」34.6cm×2024.4cm、「坤」34.4cm×570.6cm）

<sup>(32)</sup>と同じ著者・成立年代と推定でき、横山吉春・山上嘉広・池上

政乗・池上吉政・大西政乗・池上政致への伝来を経て、池上延世による写本<sup>33</sup>。鎌倉御所に仮託した屋敷全体の諸建築設計論が記録され、「乾」の序文・奥書を含む24項目は〈説文〉による設計論で、「坤」の23項目はそれに対応する〈図面〉である。「乾」巻頭の屋敷配置図は、坂上嘉継・山上嘉広の記による『山上家文書（屋敷図）』（山上家所蔵）「鎌倉御所」の〈図面〉を祖本として寛永12年（1635）頃に遡る事ができ<sup>34</sup>、武家屋敷設計の正統的規範図として故実視されている。記載内容は、この配置図を基に武家門・遠侍・舞台・広間…と各建物を、表外回りから始め次第に奥向へと説明している。

5-3. 『（清水家伝来）武家鎌倉図』『上』『下』（金沢市立図書館蔵）：「上」濃茶地地色紋様入布表紙（27.1cm×595.5cm）、「下」白地紙表紙（27.1cm×1301.1cm）・2巻・卷子本

5-4. 『（岩城家伝来）武家鎌倉図』『（上巻）』『（下巻）』（滑川市立博物館蔵）：「（上巻）」黒地金銀紋様入布表紙（27.7cm×989.9cm）、「（下巻）」青灰色地紋様入布表紙（26.5cm×994.4cm）・2巻・卷子本

全巻とも写本。原本は<sup>(35)</sup>・<sup>(36)</sup>と同じく池上吉政・大西政乗の著、成立年代も同時期と推定する<sup>37</sup>。相互に過不足な項目がある組合本で、岩城家本「（上巻）」と清水家本「下」との組合せが本来の様態として『武家鎌倉図』[以下<sup>(38)</sup>]とみなせる。<sup>(39)</sup>は<sup>(40)</sup>の内容を基としているが、〈図面〉と〈説文〉が併記され、建物ごとに〈説文〉の一部を〈図面〉に記述して立面・断面図を併描している。さらに<sup>(41)</sup>では、古法・当世法の技法体系の相違を述べる新項目を加え、四天王寺流系の<sup>(42)</sup>や公刊本等といった他家史料も参照・引用されて<sup>43</sup>、いわゆる「武家記集」として最大限の内容的充実・発展がはかられ、〈学理書〉を志向しての真摯な編纂姿勢が特記できる<sup>44</sup>。

5-5. 『既鷹部屋等図』（静嘉堂文庫池上家文書蔵）[以下<sup>(45)</sup>]：紺地金紋様入布表紙・1巻・卷子本（27.9cm×767.1cm）

池上延世による寛延3年（1750）～寛政元年（1789）の写本。9項目の記載内容は、既と鷹部屋に関する建築設計論と道具の叙述である。

5-6. 『舞台図』（静嘉堂文庫池上家文書蔵）[以下<sup>(46)</sup>]：紺地金紋様入布表紙・1巻・卷子本（28.8cm×719.7cm）

池上延世による写本。舞台に関する設計論7項目からなり、まず観世流・宝生流における〈真〉〈行〉〈草〉の格式に応じた設計方法を説く。観世流は江戸幕府筆頭流派としての正統性を、宝生流は加賀宝生流として定着する地域性を重視した学理意図と理解できる。能舞台の源流とみなして泉殿の設計論や、普遍化した舞台設計の典型を説き、舞台設計論に関して最も完成された史料とみなせる。

5-7. 『建築図』（静嘉堂文庫池上家文書蔵）[以下<sup>(47)</sup>]：薄茶地金紋様入布表紙・1巻・卷子本（27.4cm×215.9cm）

池上延世による写本。2項目の記載内容は、客殿とその門という聖家用の設計論を記載して、実在した建築の記録かとも推察できる。

5-8. 『武家鎌倉様』『上』（石川県立図書館蔵）<sup>(48)</sup>：無表紙・1巻（全2巻）・卷子本（28.0cm×640.0cm）

筆者・筆録年記は不明。序文によると全2巻構成と判明するが、「下」は紛失して欠本である。全14項目の内容は<sup>(49)</sup>の写しで、ゆえに当書の成立も<sup>(50)</sup>の元禄14年（1701）を遡るものではない。鎌倉御所配置図以外は総じて、武家屋敷の付随的建築である。

## 6. 江戸建仁寺流系本

江戸建仁寺流系本の主体は、作事方創設以来の大棟梁甲良家の

技術を伝える諸史料で、いわゆる堂宮雛形の筆写本が大半であるが、屋敷雛形としては7史料が確認できる。

6-1. 『武家式』(東京都立中央図書館蔵) [以下**武式**] : 茶表紙・1巻・卷子本 (31.2cm×643.1cm)

奥書の「宮大棟梁/甲良豊前」は甲良家第3代宗賀を指し、成立年代は承応3年(1654)~貞享2年(1685)と考定されている<sup>9)</sup>。題名に顕示されるように武家屋敷専一の技術書で、全12項目は<図面>による。<図面>に寸法指示は皆無であるが、非常に正確に描かれている。建築名には「御」が付され、徳川家の殿舎を意識して記述されたと推察できる。記載内容は、広間・厩・舞台・武家門・鷹部屋についての平面・立面図で、広間内部意匠についても室内展開図を示している。なかで玄関や花灯窓付書院を記載している事は、(唐様)の正統を誇る甲良家の技術書として特徴的と考える。

6-2. 『大工割方雑集』(東北大学狩野文庫蔵) [以下**割方**] : 無表紙・1巻・卷子本 (30.0cm×1700.7cm)

著者の坂上勘兵衛は、甲良家初代宗広とつながる人物で、また項目間に「\*天和元年(1681)十月十三日」との筆録年記が記される<sup>10)</sup>。「雑集」とあるように、「和泉嘉右兵衛門伝来」「甲良又兵衛/児玉次郎吉殿」「坂上勘兵衛」と複数の匠家の設計論が混在しており、また全く同じ項目が重複記載される等、まさに(雑録書)といえ、原本とした様々な建築技術書の存在が推察できる。全31項目は、堂・社・門・塔・屋と多岐にわたる内容で、<説文>と<図面>、および<図面>への寸法指示の書き込みにより、寸法構成論を説明している。屋の記載内容は、塀重門・広間に関する平面・立面・断面(室内展開)図や部分詳細図を主体に、<説文>が併記される。さらにより一般的な、妻立面の木割も説かれている。

6-3. 『(甲良宗賀伝来目録)』(静嘉堂文庫池上家文書蔵)「御所様小割完」[以下**甲御**] : 茶表紙(後補)・袋綴1冊(全和綴本4冊・卷子本3巻)・美濃本(26.7cm×19.1cm)、「小割図」[以下**甲図**] : 茶地金紋様入布表紙(後補)・1巻・卷子本(28.5cm×782.1cm)

いずれも奥書に、貞享元年(1684)または貞享2年の甲良豊前宗賀の記名があり、上記のように仮称する<sup>11)</sup>。この他に「宮殿木割完」「聖家伽藍木割完」「聖家伽藍図」「禅家伽藍木割完」「禅家伽藍図」とから構成され、後述『建仁寺派家伝書』原本の様態を伝存する史料である。**甲御**の3項目は、御所用・堂宮用に共通する部分意匠として基準となる寸法構成論を<説文>記述し、部分から全体の統一をはかる編纂意図がうかがえる。さらに**甲図**はそれを<図面>化している<sup>12)</sup>。

6-4. 『建仁寺派家伝書』(東京都立中央図書館蔵)「匠用小割」[以下**建匠**]「匠用小割図」[以下**建図**] : 薄茶表紙・袋綴各1冊(全14冊)・半紙本(24.9cm×16.8cm)

「縫匠録」「神社」「神宮相殿」「諸堂」「上棟」「上棟三段品」「門集」「禪家」「伽藍」「層塔」「宝塔類」「数寄屋」との全14冊構成で<sup>13)</sup>、**建図**<sup>14)</sup>を除き全て<説文>記述されている。著述年代は延宝5年(1677)年~宝永(1710)頃の、かなり長期にわたり成立したもので、現本は4代甲良宗員が宝永末年頃に、父宗賀や叔父宗俊の著述を、なかば清書する形で編纂したものである。甲良家技術書、特に堂宮建築設計論に関する最も完備収録された基幹本で<sup>15)</sup>、四天王寺流の『匠明』と対比さるべき性格をもち、当書成立以後の史料に対して規範書となる。**建匠**は**甲御**とほぼ同内容であるが、比較して**甲御**の方が誤字・脱字が若干ある。**建図**は**甲図**と比較すると、両書で類似する<図面>が描

かれてはいるものの、構成・項目数や一部の木割において相違し、本書ほどには整備されていない。そして**建図**は、**甲図**に加えて『(甲良宗賀伝来目録)』『禅家伽藍図』の内容を、一部含んでいる。

6-5. 『御本丸広間棟建方并建勾配破風絵図』(東京都立中央図書館蔵) [以下**本丸**] : 黄緑表紙・1巻・卷子本(27.5cm×336.3cm)

甲良家伝来の屋敷雛形で筆者等は不記だが、甲良棟利による宝永元年(1704)~享保20年(1735)の史料と推定できる<sup>16)</sup>。武家屋敷の典型として、江戸城本丸大広間の基本様式としての設計論を5項目記し、当時の設計理念がうかがい知れる。<説文>も記されるが、立・断面(室内展開)の<図面>を主体として、内容は比較的詳細に及ぶ。

6-6. 『社向書 木割』(東京都立中央図書館蔵) [以下**社向**] : 茶色布表紙・1巻・卷子本(17.8cm×1287.0cm)

甲良棟利による、宝永(1704~1710)頃に筆録された史料と推定されている<sup>17)</sup>。全て<説文>による31項目であるが、屋に関連する「広間」の1項目を除き、『建仁寺派家伝書』にみられる内容である。住宅設計論も説いている点で、『社向書』なる題名は適当でない。堂宮設計論に関して『建仁寺派家伝書』と比較すると、概して記述表現や木割内容が類似するが、棟利自身の考えによる意図的な変更部分も盛り込まれている。こうした様態からして、**社向**は若年18歳の棟利が神社建築を学ぶために記し始め、やがて途中より目的を変え、住宅建築を含む諸建築にまで及んだものと推され、題箋に細書付加された「木割」なる文字に、その経過を推察する事ができる。

6-7. 『諸堂 甲良棟全編』(東京都立中央図書館蔵) [以下**棟全**] : 紺地布表紙(後補)・1巻・卷子本(27.0cm×1932.5cm)

「宮匠御作事方大棟梁/建仁寺流 甲良棟全」の編なる、天和5年(1834)~慶応4年(1868)の史料である<sup>18)</sup>。<図面>主体の全41項目からなるが、甲良家本来の技術内容(基幹本)と部分的な関連しかない。特に屋の記載内容である広間・舞台は、公刊本に類する内容である。収録順序に特性はなく、内容的な重複項目を含む。

## 7. 小普請方系本

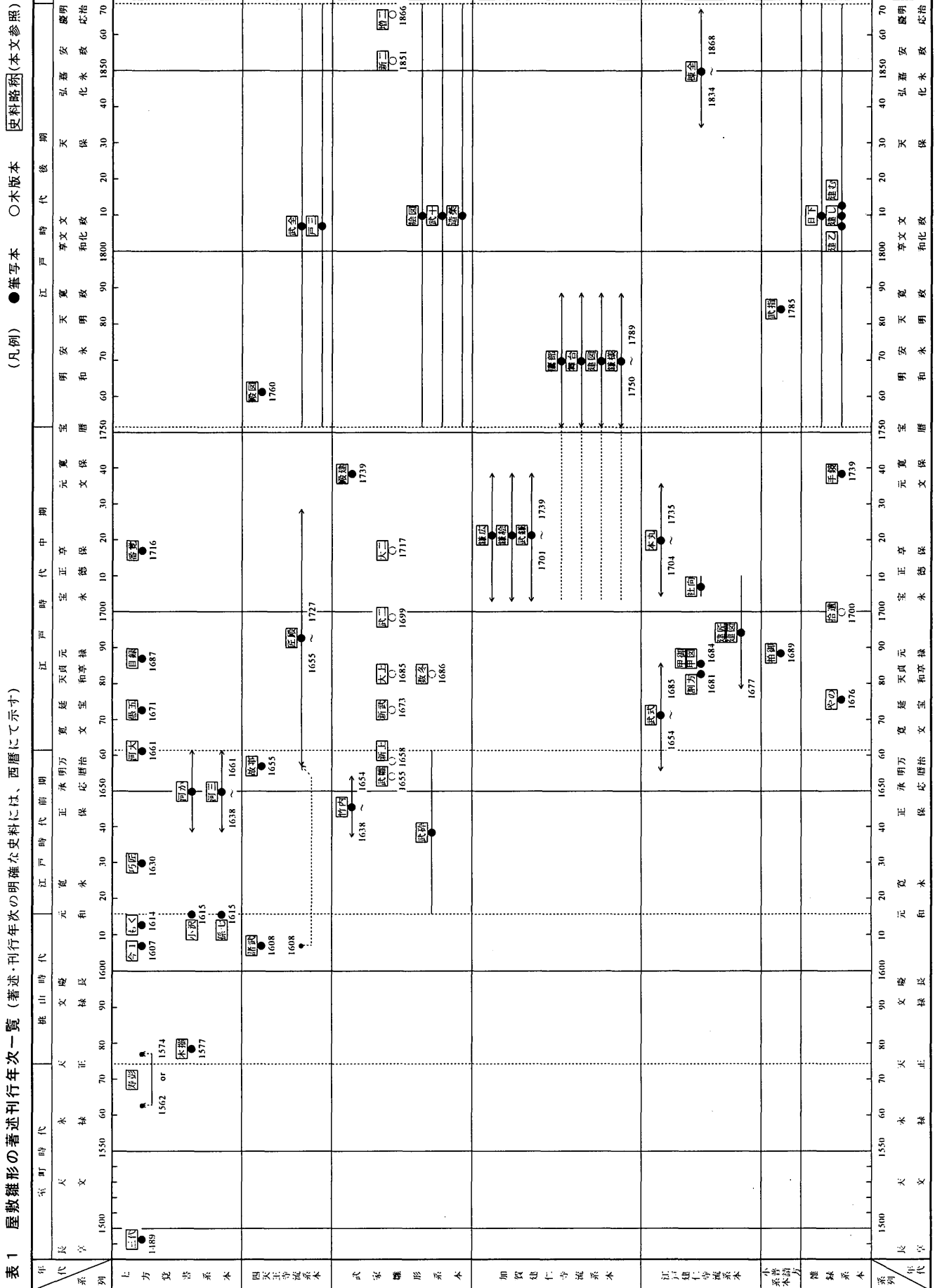
江戸中期以降に作事方を凌駕する業績を残す小普請方大工<sup>19)</sup>の建築書は、固有の内容を多く含む次の2史料がある。

7-1. 『(柏木政等伝来目録)』「御所様之部」(竹中大工道具館保管) [以下**柏御**] : 紺地茶模様入布表紙・1巻(全5巻)・卷子本(32.9cm×717.1cm)

「神社之部」「門之部」「仏殿之部」「塔之部」との全5巻よりなる。総括名称はなく仮称。それぞれの巻に外題を付け、「御所様之部」のみ内題がみられる。奥書に「柏木氏政等/元禄二<sup>20)</sup>年(1689)正月受之者也/柏木太郎右衛門政虎」とあり、本書は小普請方家の技術書のなかで他家に多くを依存しない、固有の内容を伝えている。**柏御**の目次・奥書を含む14項目は、内容的に武家屋敷の設計論で、厩、広間、舞台・鞠懸、屋敷内の祠について<説文>と<図面>が記され、技術的な内容を中心としている。

7-2. 『武家広間惣指図之事』(明治大学蔵) [以下**武指**] : 無表紙・1巻(全3巻)・卷子本(26.6cm×405.7cm)

「天明五年(1785)二月写之 小河原作太夫」で、原本の著者・著述年代は不明。武家屋敷を対象とする全10項目よりなり、その記載内容は武家屋敷の付属施設(厩・舞台・鷹部屋・鞠懸)と武家門、広間を説明している。祠の記述もあり、**柏御**と学理構成が似る。





## 8. 雑録系本

以上の類型から逸脱する雑録系本の5史料を考察する。

8-1. 『やの物』(河内家蔵)[以下<sup>1)</sup>やの]: 茶表紙・大和綴・半紙本(23.3cm×15.6cm)

中世唐様の中心地、鎌倉の技術内容を伝える鎌倉系本である。表紙・奥書に「河内大蔵」、また「延宝四年(1676)/たつノ/五月吉日」とある。屋についての1項目からなる。

8-2. 『新編拾遺大工規矩尺集』(東京都立中央図書館蔵)[以下<sup>2)</sup>拾遺]: 地紋入布表紙・袋綴1冊(全3冊)・半紙本(22.4cm×16.2cm)・単辺無界・版心「規矩尺下/丁数」

公刊木版本であるが、他の公刊本とは内容構成が全く異なり<sup>3)</sup>、むしろ後述『建地割法』に似た独特な特徴をもつ。外題では「上」「中」「下」の全3冊組であるが、「上」と「中」に、それぞれ上・下とする目録および内題があり、また「中」の最後と「下」の最初は連続している。奥書は、「元禄十三年(1700)一月吉日」の「書肆北畠茂兵衛」とあるのみで、著者は不詳。しかしながら、寺社に属する工匠の筆によると推察できる。「上」は神社建築、「中」「下」は寺院建築の設計論で、記述内容に統一はないが、かなり詳細である<sup>4)</sup>。屋は「真言天台花嚴律宗此宮殿」として天台・真言・華嚴・三輪・律=5宗の客殿設計論を記し、また同時に、武家屋敷に関してもこれを応用する様にとの但し書きを付記する。つまり、内容的には武家屋敷=広間の設計論と大差なく、(寺家)と(武家)の屋を併記する事で、普遍的な住宅建築学を説く編纂姿勢が注目される。

8-3. 『大工雛形手鏡』(国会図書館蔵)[以下<sup>5)</sup>手鏡]: 焦茶表紙・袋綴1冊・横本(13.6cm×19.5cm)

児玉与次兵衛の著、「元文四年(1739)/八月廿八日/児玉源助」とある<sup>6)</sup>。主に規矩や絵様を集めた(雑録書)で、屋についても2頁あるが、主殿の(図面)と設計寸法論の概要を述べるにとどまる。

8-4. 『(日本建築参考図)』「下」(東京大学蔵)[以下<sup>7)</sup>下]: 金緑地紋入布表紙・1巻(全2巻)・卷子本(27.2cm×837.8cm)

「上」「下」の全2巻。表紙題箋は後補であるが、これを仮題とする。著述年代は江戸時代後期と推され、児玉家の流れをくむ史料である。「上」には机などの小道具や須弥壇・経台と、唐破風・妻飾など屋根に関する木割と規矩図、および種々の図案が雑録的に記される<sup>8)</sup>。「下」は武家屋敷に関して、主殿、舞台・鞠懸、武家門についての12項目の記述からなり、屋敷雛形としてかなり充実した内容をもつ。

8-5. 『建地割法』(京都府立総合資料館蔵)「乙」[以下<sup>9)</sup>乙]: 白布表紙・1巻(全冊子本12冊・卷子本2巻)・卷子本(26.9cm×775.3cm)、「しゅでんの事・三間しきたいの事」[以下<sup>10)</sup>しゅ]: 紺地紋入布表紙・袋綴1冊・大本(31.9cm×23.2cm)、「むまの事・へいちもの事」[以下<sup>11)</sup>む]: 紺地紋入表紙・袋綴1冊・大本(31.9cm×23.2cm)

史料は、筆跡より同一著者により書かれたものと判明するが全てに奥書はなく、著者および著述年代は不明。とりあえず江戸時代後期の史料と推定できる。卷子本「甲」「乙」は(図面)主体で設計論が記され、また冊子本は「たほうのたうの事」「三ちうのたう乃事」等、様々な内容である。「乙」は社・屋・堂・塔についての全14項目からなる寄せ集めの史料といえ、屋敷雛形に関しては主殿の1項目のみである。「しゅ」は主殿に関する全5項目で、まず主殿全体についての設計論を記した後に、外部意匠・内部意匠を説明している。「む」は、厩と堀重門に関する全9項目で、主体は厩設計論の史料である。

## 結 — 屋敷雛形の変遷過程 —

以上、屋敷雛形62本の書誌的考察を行った。最後に、史料が成立・展開・普及した過程をまとめ(表1)、結論とする。

i 中世末(室町時代)に「日本番匠記系本」<sup>12)</sup>が成立して、ここに日本古典住宅建築学として屋の概念を説く(原理書)が成立する。さらに近世初頭(桃山時代)にかけて、屋の内容は施主を(武家)に特定した武家屋敷の設計論へと変質する。この武家屋敷設計論は、<sup>13)</sup>木拙・<sup>14)</sup>小沢・<sup>15)</sup>諸武のように、実用を志向しての(覚書)である。

ii 江戸中期になると、各流派において基幹となるべき建築書が完成する。武家屋敷設計論を止揚して、より普遍的な住宅建築設計学体系の大成が認められ、ここに住宅様式学の確立がみられる。つまり、四天王寺流系本<sup>16)</sup>、加賀建仁寺流系本<sup>17)</sup>、江戸建仁寺流系本<sup>18)</sup>、<sup>19)</sup>建匠・<sup>20)</sup>建図はいずれも、棟梁家の正統意識を顕現させるマクロな(学理書)と歴史評価できる。一方(覚書)としての武家屋敷設計論を発展させる公刊木版本も刊行され、建築様式学体系における1分野としての(学理書)に展開している。

iii そしてこれ以降、公刊本を中心に各流派の設計技術を混在させる(雑録書)へと変遷して、住宅建築学の普及過程が看取できる。

以上、本稿では書誌的考察に基づいて歴史的特質を概括したが、これら史料に記された技術内容、および屋敷雛形としての記載内容・学理様態などの変遷については、別稿を予定している。

## 注

- 河田克博編著『日本建築古典叢書3 近世建築書—堂宮雛形2 建仁寺流』昭和63年大龍堂書店刊
- 内藤昌著『近世大工の美学—環境倫理としての日本古典建築学』平成9年中公文庫刊
- 太田博太郎監修、内藤昌・渡辺勝彦・麓和善・岡本真理子・河田克博著『愚子見記の研究』昭和63年井上書院刊
- 内藤昌「大工技術書について」『建築史研究』第30号昭和36年10月所収
- 新見貴次・永井規男「洲本御大工斎藤家旧蔵の木割書について」(『日本建築学会近畿支部研究報告集』昭和56年6月所収)、渡辺勝彦・岡本真理子・内藤昌「いわゆる『木割之注文』(『寿影覚書』)における堂・社・門の木割体系」同「〜木割体系の特質」(『日本建築学会計画系論文報告集』第352・378号昭和60年6月・62年8月所収)
- 永田恵子・岡本真理子・河田克博・仙田満・内藤昌「建築書系道具雛形の書誌と類型」(『日本建築学会計画系論文報告集』第510号平成10年8月所収)
- 内藤昌・西村真孝「木割書『今福彦兵衛伝来目録』について—その1—その2—」(『日本建築学会東海支部研究報告』昭和45年11月・昭和46年6月所収)
- 内藤昌・西村真孝「木割書『孫七覚書』について—その1—その4—」(『日本建築学会東海支部研究報告』昭和44年11月所収)
- 河田克博・麓和善・内藤昌「四天王寺流基幹本の書誌と構成」(『日本建築学会計画系論文報告集』第412号平成2年6月所収)、山崎純・岡本真理子・麓和善・河田克博・仙田満・内藤昌「四天王寺流基幹本「武家記集」の内容的特質」同「〜学理的展開」(同第486・509号平成8年8月・10年7月所収)
- 伊藤要太郎校訂『匠明』・同著『匠明五巻考』昭和46年鹿島出版会刊
- 麓和善・若山滋編著『日本建築古典叢書8 近世建築書—構法雛形』平成5年大龍堂書店刊
- 内藤昌「竹内家の書院造木割書について」(『日本建築学会論文報告集』第66号昭和35年10月所収)
- 岡本真理子編著『日本建築古典叢書5 近世建築書—一座敷雛形』昭和60年大龍堂書店刊
- 麓和善編著『日本建築古典叢書9 近世建築書—絵様雛形』平成3年大龍堂書店刊
- 河田克博・岡本真理子・麓和善・内藤昌「加賀建仁寺流系本における屋敷雛形」(『日本建築学会計画系論文報告集』第399号平成元年5月所収)
- 内藤昌「清水家の書院造木割書について」(『日本建築学会論文報告集』第69号昭和36年10月所収)
- 渡辺保忠・中川武『新編拾遺大工規矩尺集』における木割の方法と寸法体系の構成」同「〜木割のモジュール・システムとしての特質」(『日本建築学会論文報告集』第194・198号、昭和47年1月・8月所収)

(1998年5月10日原稿受理、1998年10月27日採用決定)